



around the world

難民で欧州を揺さぶる ベラルーシ

ロシアNIS貿易会・
ロシアNIS経済研究所長

服部倫卓

昨年来、人口九〇〇万人あまりの東欧の小国ベラルーシが、たびたび国際社会を騒がせている。この国では「欧

州最後の独裁者」ことルカシエンコ氏が、四半世紀を超える長期政権を築いてきた。昨年八月の大統領選に不正があったとして、全国的な抗議運動が巻き起こったものの、体制側はそれを徹底弾圧し、今も暴政が続いている。

その過程では、今年五月にライアンエア―機強制着陸事件が起き、八月には五輪出場のために来日していた女子陸上選手が亡命する事件も発生、ベラルーシの異常な国情を印象付けた。

そして、ここに来て国際的な大スキャンダルとなっているのが、中東などからの難民の問題である。ベラルーシを経由して、隣接する欧州連合（EU）圏に入境しようとする難民が、主に対ポーランド国境に殺到し、騒然とした状況となっているものである。

難民たちの詳細は明らかではないが、一月中旬の時点で数千人規模に膨れ上がっている。大部分はイラクから逃

れてきた人々で、クルド系が多いとされる。一部アフガニスタンやシリアからの難民もいるようで、アフリカ難民も加わりつつあるようだ。彼らは中近東から空路でベラルーシのミンスク国際空港に飛び、そこから陸路で対ポーランド国境などに押し寄せている。

元々、ベラルーシはビザ取得および入国が簡単な国で、特に紛争国の国民に対してはビザ簡素化または免除の措置をとっていた。その情報が広まり、近年は中東・アフリカからベラルーシを経由でEU行きを目指す人々が増えていた。

そうしたなか、EUはライアンエア―機強制着陸事件を受け、今年六月にベラルーシ経済の急所を突く経済制裁を打ち出した。その際に、EU側でルカシエンコ体制批判の急先鋒となったのが、ポーランドやリトアニアといった近隣諸国に他ならない。ルカシエンコ

政権は、それに対するリベンジの機会を探るなかで、難民を使ってEU近隣国を揺さぶることを考え付いたのだろう。

当初はベラルーシ・リトアニア国境を不法に越える難民が増加し、リトアニア側を慌てさせた。そして、八月以降はベラルーシ・ポーランド国境が緊迫化、一月になると特に難民の規模が膨れ上がり、ポーランド側が国境地帯に軍を投入する事態となった。ルカシエンコ氏は全面否定しているものの、ベラルーシ政権当局が意図的に難民を対ポーランド国境地帯に送り込んでいることは、確実と見られている。

ルカシエンコ政権としては、難民を人質にEUに揺さぶりをかけ、交渉の席に引っぱり出して、あわよくば経済制裁を撤廃させるといったことを目論んでいるのであろう。しかし、もはやルカシエンコ氏を正統な大統領とも認

めていないEUが、その手に乗るとは考えにくい。EUはむしろ、追加制裁を打ち出す構えである。

欧州の一部の政治家からは、今回の難民騒動を引き起こした黒幕は、ルカシエンコ体制の庇護者であるロシアの



ベラルーシからポーランド領に入ったイラク人難民に話しかける NGO 関係者。ポーランド国境警備隊と警察官が取り囲む。10月14日撮影(ロイター／アフロ)

プーチン大統領ではないかとの見方が出ている。ポーランドのモラヴィエツキ首相は一月九日、「ルカシエンコは単に命令を執行しているだけで、プーチンこそ難民危機を引き起こした張本人だ」と言い切った。だが、実はプー

チンとルカシエンコの関係は冷え切っている。ロシアと欧米の関係が険悪であるとしても、今ここでロシアがEUにこれほどあからさまな攻撃を仕掛けるというのは不可解だ。今回の騒動はあくまでも、ますます常軌を逸しつつあるルカシエンコ政権の末期症状の現れと見るべきであろう。●